

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

む　　そう　　えん　　ぎ
無双艶戯
墮とされし龍將姫

小説 高岡智空

挿絵 久水あるた

第一章 成州の軍師將軍

第二章 偽捕輪姦の計

第三章 淫悦の香り

第四章 墮淫への誘い

第五章 崩国の淫女

エピローグ 魔性

006

066

101

152

204

246

登場人物紹介

Characters



きょうすいりん

姜 翠鈴

大陸南西部の国「成」の軍師将軍。知略に長け、武勇を誇り、敵からは「成州の龍」と恐れられるほど。李姫を守るため、「楊」の軍門に下る。

り き

李姫

「成」の王妃。常に笑顔を絶やさず、いざというときは凜とする傾国の美女。麗によって捕らえられてしまう。

れい

麗

北の大国「楊」の参謀。赤銅色の胴衣を纏い、怪しげな術を使う。

う がい

于凱

「楊」の君主。太った身体に熊のような顔の男。粗暴で女に目がない。

ちょうゆう

趙攸

「成」の領主。翠鈴の主君であり、李姫の夫でもある。

(許しません、この女……っ)

手の肉がこそげるほどに爪を立てて拳を握り、やがて大きく息を吐くと同時に、開いた手の平をゆつくりと膝下へ——脚線を覆う腰布衣の裾へと伸ばし、それをつまみ上げる。

周囲の男どもが途端に生唾を飲み込み、視線を下半身に集中させるのが感じられた。不躰なその動きに羞恥が押し寄せ、全身がカッと熱くなってゆく。それでも、李姫のことを思うと手の動きを止めることはできず、歯噛みしながら口を開き、ささやかれた言葉を吐く。

「戦の汗と、み……淫らな汁に、まみれた……翠鈴の、股布でございます……ど、どうぞ……ご覧くだ、さい……っ」

言い終えると同時に、顔から火が出たかと思った。正面から集まる男たちの顔を直視することができず、翠鈴は羞恥と屈辱に表情を歪めて顔を背ける。

「ほうほう、確かに……股布が汚れておるようじゃな、ぐふふふ」

「それに牝の臭いがすごいですな……こちらまで漂っておりまして、將軍殿……ふふふ」
腰布衣の内にこもっていた甘酸っぱい臭気が翠鈴の周囲に漂い、男たちは鼻をヒクつかせてそれを吸い込んでいるのが感じられた。

「くっ、ううう……っ！」

自分を辱める極限までの羞恥に、ますます顔が赤く染まる。しかし、これほどの恥辱を味わわされているというのに、身体は熱で疼きっぱなしだった。葉の影響であろうとなか

ろうと、麗に足指で弄ばれ、股間を湿らせてしまったのは自身が一番よく知っている。それを間近で観察され、指摘されるなど女としてこれ以上の悔しさ、恥ずかしさはない。

（私がこのような痴態を晒すなど……絶対に、絶対に許しませんっ！）

だが、腰布衣をつまんだ手が知らず下げられそうになるのを見咎め、麗がまた呟く。

「はあ……李姫様でしたら、にこやかな笑顔を振舞ってくださいるのでしょに……もっと腰を突きだし、よく見てほしいとおねだりしながら……ねえ？」

思わずビクッと身を震わせ、隣に立っていた麗を睨みつけると、いやらしい笑みを口元に張りつけこちらを眺めている視線とぶつかる。けれどその瞳は笑っていない、いつでも李姫をかどわかし、この淫らな舞台に立たせてやると言っているかのようだった。

（いけません……李姫様を、李姫様だけは、守らなくては……私がどうなろうとも……！）

決意にキュッと唇を引き締め、無理やりぎこちない笑顔を浮かべると、見たくもない周囲の下卑た顔を見つめる。そのどれもが翠鈴の股間を凝視しているのがはつきりとわかり、耐え難いほどの羞恥が押し寄せて、全身が震えた。

「ど、どうぞ……このように、薄汚れた股でよろしければ、くっ……もつとよく、ご……ご覧になってください、まし……」

脚を肩幅以上に開き、腰を少しずつ前へ突きだしてゆく破廉恥な格好に、消え入りたくなる。だが男たちはその言葉に應えるように身を乗りだし、接するほどの距離まで肉薄してきてしまう。まるで股布の奥まで見透かそうというほどの熱烈な視線は、触れられてい

るかのような感覚を生み、股布の上から翠鈴の陰唇を揉み捏ねてくる。ただの錯覚だとはわかっていても、その屈辱に怒りが込み上げた。そんな翠鈴の態度が心底おかしいというように嘲笑しながら、麗が舞台へと上り、腰と尻に腕を回して翠鈴を抱き寄せる。

「まったく……どうしようもない、淫らな女ですわね、貴女ときたら……ふふふ」

「はあ……っ、くっ、うう……」

抗う隙もなく抱き寄せられ、麗の指に胴衣の上から乳首を突かれた。刹那、痺れるような感覚が奔^はり、全身の力が緩んでしまう。溢れかけた声を押し殺すも、身体は指が乳房に埋まってゆくのに反応してピクピクと躍動し、陰唇が割れほころぶのを感じていた。

（そんなっ……こんなこと、でえっ……んっ、くうん……）

考えたくもないが、男たちの視線だけで身体の芯は火照ってしまっており、そこに女の指ならではの快楽を味わわれて、完全に火がついてしまったのだろう。けれどあんな恥辱で身体が反応していたなどと知られたくはない——その一心で、翠鈴は快感の誘いに必死で抗おうと眉根を寄せ、身をよじりながら疼きを鎮めようと躍起になる。

だが、薄布の奥でじつと翠鈴を見つめていた麗は口元を歪め、冷たく声を響かせた。

「ふふふふ、本当に可愛らしいこと。あんなはしたない姿を披露して、すっかり発情してしまつたようですわね、翠鈴は……」

「ふあ……そっ、そんなことは——あひっ、ひあんっ!？」

秘めておきたかつた事実をあつさりと暴露され、羞恥が身を焦がす。とつさに否定の言

葉を返そうとするが、股布をチュクリ……と押し込まれると、途端に熱っぽい嬌声が溢れてしまった。

「ほおら、こんなにいやらしい音を奏でているが……感じていないはずがありませんわよねえ？ まったく、殿方に股布を見せつけながら発情してしまうだなんて、まるで獣のようですわ……はしたない、淫乱な女ですこと……」

「ちがっ……うんっ！ 違います……私は、そんな女じゃ……くひっ！」

スルスルと太ももを撫でながら股布を押し込んでいた手が、次第に上へと忍び寄り、やがて股布の中に直接触れてくる。その瞬間、グチュウ……ッと果実でも握り潰したような汁氣を孕んだ音が響き、翠鈴は喘ぎをもらしながら耳まで朱に染まった。

「いひゃっ、や、やめなさ……ひいっ！ んっ、くうっ、そこ……んはあっ！」

これが本当に、成州の龍とまで恐れられた軍師將軍なのかと疑いたくなるほど、可憐で淫靡な嬌声が次々と迸る。男たちは息をするのも忘れて黙り込み、食い入るように女同士の睦みごとに見入っている。その誰もが股間を盛り上げているのを横目で確認し——クスリと微笑みながら麗は翠鈴への愛撫を本格的に開始する。

「あら、誰が腰布衣を下ろしてよいと言いましたの……寝のなっていないコですわ」

身体力が抜けて翠鈴が腰布衣を支えられなくなると、それを待っていたように麗は布地を引き裂き、破り捨てた。下半身を股布だけという格好にされ、翠鈴は羞恥に頬を染めて股間を隠そうとするが、それよりも麗の動きが早かった。抵抗の力が入らぬ翠鈴の腕を

支え、恥ずかしい格好のまま、隠すことも許さずその場に無理やり立たせる。

「は、離しなさいっ……腰布衣も、元に戻すのですっ！早くっ！」

「もう破ってしまいましたもの、無理ですわ……それに、何度も同じことを言わせないでくださいます？ 抵抗はおやめなさいな、李姫様に代わっていただきますわよ？」

またそれか、と翠鈴の表情が怒りに歪む。だがそれを受け流すような冷たい笑みを向けられ、翠鈴はダラリと全身を脱力させる。

（くっ、李姫様のため……李姫様の御身を、お守りするためです……耐えなければっ！）

抵抗を失い、上半身の胸衣と下半身の股布だけの格好にされた美少女の姿に、周囲からドッと歓声が上がる。

「ぶはははっ、よい格好じゃのお、翠鈴！ 今後は戦場にもそれで立つがよいわ！」

「はははっ、それはいい！ 兵たちの士気も高まりましたよう！」

屈辱と恥辱を煽る言葉に、翠鈴はカァッと頬を真っ赤にする。こんな痴態を何人もの男に見られているなど考えただけでも気が変になりそうだというのに、それをはっきりと認識させる下卑た揶揄が投げかけられるのだ。だがその羞恥はなぜか妙な熱と疼きに変えられ、身体の芯にジクジクと染み広がっていつてしまう。

「ほら、皆様も盛り上がってきたようですわ……貴女も楽しみなさいな」

魔性の女の手が胸を弄り、もう一方が股布の奥へと侵入してきた。キュウッと押しつけるように揉みしだかれた乳房は胸衣にびつたりと張りついてその形を浮かび上がらせ、尖



り勃^たった乳首が布地を突き破らんばかりに上を向く。それを指で挟んで捏ねられると、痺れるような快感が胸の奥から湧き起こり、自然と腰が跳ね躍ってしまった。だがそれは、股布内に潜り込んだ指に、潤んだ秘部を押しつける行為にほかならず、すっかり花開いた肉華弁が女の滑らかな指先でクチュクチュと音色を奏でる。

「あひいっ！ ひくっ……そこ、はあ……だめ、です……っ！ んふうっ！」

ブルブルと震える腕を懸命に伸ばし、股間を弄る麗の手を押さえようとする。しかしその声は淫熱に浮かされて艶かしく、その顔は痺れるような快感を受けて恍惚としていた。誰が見ても、感じてしまっているのは明らかである。

身を離そうと麗に押しつけたもう一方の腕は、喘ぎをこらえようとするあまり、力を込めて彼女の胴衣を握り締めていた。純情な乙女が初めての性交で見せるような初々しい仕草に麗は嗜虐的な笑みを浮かべ、ますます股布の内で指を激しく蠢かせる。

——グチュウッ、ニチャ、クチュ……ニルウ、ピチャ……。

「ひいんっ、んっ……んううっ！ いやっ、やめっ……んくうっ！」

見て確認せずともそこがどのような構造で、どこが感じるのかが手に取るようにわかるのか、麗の指先は陰唇を一枚一枚なぞるように割り開き、その奥で熟れ火照っている媚粘膜に指先をしゃぶらせる。ピチャ、ピチャと甲高い音を響かせて、どれだけ濡れているかを知らしめるような手技に翠鈴は消えてしまいたくなるほど恥じ入る。

それだけでは飽き足らないというように、膣口の周囲を弄る指とは別の指が、その上方

にある敏感な肉芽を狙う。少し触れただけでビクッと翠鈴が跳ねたのを確認し、しなやかな指の動きは瞬く間に包皮を剥き上げ、溢れた淫液を塗り込んで捏ねくり回す。

「ひあ ああつ、んくつ、んんうう——っつ！ ひうつ、だ、だめ……っ、いひいんっ！」

胸と陰唇、陰核までを同時に嬲られ、膣口の奥からは止め処なく牝淫液が溢れ、股布は用を為さないくらい濡れ汚れてしまっていた。

（はあつ、はああ、こんな……嘘です、これほど、濡れてっ……ひんっ!!）

己の反応を拒絶する翠鈴、けれどそんなことはお構いなしに、麗は翠鈴の身体を弄ぶ。今度は四つん這いの体勢を取らされ、そのまま尻を高々と掲げさせられる。張りのある尻肉から、細いながらも肉づきのよい太ももにかけては股間から溢れた淫粘液でテラテラと光っており、男たちの目をさらに楽しませた。

「ぐふふふ……プリプリとよう揺れておる、男を誘うためにあるような尻じゃな！」

（戯言を……くっ、見るのではありませんっ！ この卑劣漢!）

悔しさのあまりにギリッと歯を噛み鳴らす翠鈴、けれどその直後、またも背中が跳ね上がってしまう。麗が音高く桃尻に口づけし、その肌に舌を滑らせているのだ。

「んちゅっ、ちゅる、れろおお……んっふふふ、さあ……いよいよご開帳ですわよ。汚らしい股布など脱いで、皆様にオマ○コをご覧になつていただきましようね……」

「いやっ、や……やめなさいっ、やめっ……あ、ああっ！」

拒絶の声も空しく股布はあっさりと脱がされ、剥ぎ取られた。陰唇から幾筋も粘液を引

き、汚れた股布が除かれると、そこには薄桜色の美しい肉貝が姿を見せる。

「まあ綺麗ですこと……さすが生娘の翠鈴ですわ、こんなに淫らなのが嘘のよう……」

「いやっ、見ないで……くださっ——んああっ!？」

ささやきながら麗の指が肉裂の左右にあてがわれ、そのまま軽く力を込めて秘裂の奥を空気に晒してゆく。四つん這いのままの自分にはけっして見えない、けれど周りの男たちがそこを凝視していることは、痛いくらい突き刺さる視線で感じていた。

「まあ、奥の奥まで桜のような鮮やかな紅色ですわね……それなのに、こんなに淫らな液をトロトロと垂れ流して……浅ましいことですわ。ほら、わかっていますの？　ここがいやらしくぬめり光って、物欲しげにヒクついているんですよ!」

「あひいっ、ひんっ、や、やめ——ひぐううんっ!」

麗の指が粘膜を撫でなぞるたび、翠鈴の喉の奥から嬌声が溢れ、膣口からピュルピュルと淫液が噴きだした。それを見て周囲からは下卑た笑い声が響き、翠鈴をますます恥辱の淵へ追い詰める。抗うことの許されない、無理やり辱めを受けているという状況にもかかわらず、抑えることもできないで喘ぐ自分が信じられなかった。自慰以外の経験など皆無だったはずの自分が、たった一晚……いや、数刻にすぎない出来事で、本当に淫乱極まりない女に変貌させられたかのである。

(くっ、そんなはずはありませんっ!　このようなことで、誰が……っ!)

翠鈴の純潔をいまは奪うつもりはないのだろう、麗は膣口周辺の粘膜や陰核ばかりを入

念に弄り続けていた。舌を使い、指を使い、身が蕩けるような甘痒い刺激を、絶え間なく送り込んでくる。敵に屈したりはしないという強い意思に瞳を引き締め、唇を固く結んで快感に抗うも、どうしても荒い吐息がもれてしまい、羞恥に顔を歪めて悔しがる。

その目の前に——いつの間に近づいたのか于凱の姿があつた。その股間は猛々しく隆起し、上からはニタついた顔が見下ろしてきている。

「これほど淫らな女は久しぶりじゃ……もう我慢の限界じゃわい」

「な、なにを……ひっ!? んな……そ、それ、は……まさか」

翠鈴の眼前に晒されたのはそり勃つた、醜く赤黒い肉塊だった。于凱が胴衣の股間から、己の肉棒を取りだして突きつけたのである。

「なに、犯すのではない……ただ、その口で奉仕してもらおうと思うてな」

「口……で？」

意味がわからないという表情をする翠鈴に、麗が耳元へ口を寄せてボソリとささやく。

「舐めるのですわ、その淫ら極まりない、貴女の唇で……ねえ？」

「そんなっ……ひんっ、んっ、くふう……う、うう……」

背後から流し込まれる快楽に悶えつつ、翠鈴は目の前の肉塊を見つめた。樹木の太い枝のようなゴツゴツとした肉幹、それに幾筋もの血管が浮いて弾けそうなほどに躍動を繰り返している。先端はエラが張りだして拳のように太く、しかも生臭い臭いを立ち昇らせた汚液でテラテラと濡れ光っていた。初めて見る男性器——それはあまりにも毒々しく、凶

悪な肉の刃のようだった。こんなものに口で奉仕するなど、正気の沙汰ではない。

(い、いやっ……こんなの、絶対にいやですっ！)

躊躇していると、陰唇に顔を埋めた麗がたしなめるように、媚粘膜をすぼめた唇で吸い立てた。翠鈴がビクリと背を跳ねさせると、麗は唇を離して耳元に近づきささやく。

「誓いをお忘れですか？ ふふ、お可哀想な李姫様ねえ……」

(それは……わかって、います……けれど、くっ……くうっ！)

己の心与李姫の身——秤にかけるまでもなく、大切なのは後者のほうだ。そう、自分には逆らう術などない。グッと嫌悪感をこらえ、もう一度目の前の肉塊を見つめた。だがどうすればいいのか……そんな疑問を読んだのだろう、麗が指示をだす。

「まずは奉仕のお許しを得ることですわ……こう言って、ねえ……」

耳元でささやかれた屈辱の言葉、翠鈴の表情に怒りと悔しさが滲む。

「ふっ、くうう……そ、それでは……誠心誠意込めまして、于凱様の、オ……オ、チンポ……に、舌と唇にて、ご奉仕させていただきます……っ」

「むふふふ、よかろう。そこまで言うならさせてやるとするか……ほれ」

その言葉にニタリと笑い、于凱が腰を突きだして翠鈴の鼻先へ肉塊を近づける。

(さ、最低……このようなことを、私がさせられるなど……覚えていなさい！)

心の中で怒りに満ちた悪態を吐き——そして瞳を閉じ、翠鈴の桃花のように可憐な唇が、于凱の肉棒の先端に口づけた。ムワツと鼻腔へ届いた生臭さとぬるついた汚液の感触に吐

き氣を覚えるも、それを驚異的な精神力で押し殺す。そんな様子を眺めていた麗はクスクスと笑い、小さくささやくのだった。

「結構ですわ……ですが、次からはもう少し嬉しそうになさいませ……では、麗のやるとおりに、真似てやってみせなさいな……」

そう言つて麗は翠鈴の隣で跪くと、于凱の股間に顔を近づけ、頬擦りしながら舌を肉棒の側面に這わせてゆく。唾液をたっぷり舌に乗せてそれを亀頭からまぶしかけ、顔と舌先を利用して擦り込むような愛撫を施しているのだ。

「んあ、はあむう……れるお、ちゅばっ、じゅるう……ほおあ、やつれみらはあい……んむっ、んじゅるるるっ！」

「ひあんっ！ あはあ、は、はいい……んう、んん……」

口奉仕の間も翠鈴への責めは緩めるつもりがないのだろう、指先が秘部を弄り、陰核をつまんで官能を刺激してくる。悶えながら翠鈴は、怒りを押し殺した表情で麗と同じように于凱の股間へ顔をすり寄せた。生臭い臭氣が鼻腔に突き抜け、おぞましさに身の毛がよだつ。

（うくっ、いやっ、あ……熱い、こんなに……うう、それに、臭くて……くうっ）

すでに全体が唾液まみれだった肉棒は、先走り汁と入り混じった唾液を翠鈴の顔に擦りつけ、同時に燃えるような肉幹の熱を伝える。ドロドロだった肉棒に触れた顔は、すぐに汚されて粘液まみれになってしまう。白く濁るほどの濃厚な唾液、そして先走り汁からは

淫靡な臭いが溢れていて、顔中がその臭気に包まれてしまった。そのまま、麗がしているように唾液をまぶし、それを顔や舌で押し広げて愛撫を繰り返す。食事をする口で直接こんなものに触れるなど耐え難い苦痛だったが、自身の唾液を舐め取るようにすればまだ耐えられるとばかりに、溢れんばかりの唾液を亀頭から肉幹全体へ流し、塗り込めていった。「んはあ、あは、あう……んむう、んれおお……んっ、んんうっ、れる……ふうんっ！」舌に熱い感覚が伝わりと同時に、自身の股間からも痺れるような快感が流れ込んできた。先ほどすでに絶頂寸前だったこともあり、またも意識がその高みに向けて羽ばたいてしまいくさになる。だがいまは、于凱への口淫奉仕の真っ最中だった。こんな状況で絶頂を迎えるなど、売春婦でさえあり得ないだろう。

（いやっ、いやです……こんなものを口にして、イ……イクだなんて、絶対に……ひっ!）けれど隣の麗も絶頂の予兆を感じたのだろう、今度はツウ……と指先を滑らせて、無防備だったもう一方の穴へと近づける。尻房を割り広げたその奥、ひっそりと咲いた菊蕾に淫液を擦り込みながら、ほぐすように丁寧な摩擦を繰り返し、やがて細い指を捻じ込んできた。

「ひあ ああっ！ そんな……そこは、ちが……ふうんっ！ いひっ、ひうう……っ」「れえろお……んちゅ、ちゅるるう……んふ、そんなことを言って、嬉しそうな声をだしておられますのに……まあでも、いやと言うのでしたら……李姫様に代わっていただきましょうか？ うふふふふ……」



(またそれですか、二言目には……っ！　ですが……逆らえませんが、いまは……くっ)

口をつぐんで舌奉仕に戻った翠鈴の様子に気をよくし、麗も同じように于凱の肉棒へ舌を這わせつつも、宴の肴である女將軍への愛撫をさらに苛烈にする。両手を使って乳房や陰核をつまみ上げて刺激を加え、その一方で菊壺へ指を挿入させたのだ。

「ひああっ!?　んあっ、嘘……お腹、にいっ……気持ち、悪……んぶっ、んうっ!」

「ぐっはははは、なかなか上手いではないか、翠鈴よ!　ほれ、もっと強く舐めんか!」

ぐいと頭を引き寄せられ、于凱の股間にさらに強く顔が押しつけられ、我慢汁を浴びせられる。しかしその嫌悪感を上回る脅威は、下半身からじわじわとせりあがってきていた。

(んはああっ、だめ……だめえっ!　こ、こんな……私、お尻、なんかでえ……っ)

身体から無駄な力が抜けきっているせいか、翠鈴の不浄の穴は麗の指をなんなく吞み込んでいた。しかもあるうことか、細い一本の指だけだというのに、抽送されるだけで腰が抜けるほどの快楽を送り込まれてしまっている。鉤状に折り曲げられて腸粘膜を搔かれると、脳の奥で激しく火花が飛び散った。

「ひぐうっ!　んああ、んぶううっ!　んちゆるっ、ちゅぶっ……じゆるるうっ!」

快感を誤魔化そうというように、翠鈴は目の前の肉塊に積極的に吸いついてゆく。けれどそれは完全に逆効果だった。発情した女の身体は牡の臭気に敏感な反応を示し、ますます身体のあちこちで快感の波が発生してしまう。いつの間にか菊門は麗の指をきつく食い締め、さらに腰が勝手に揺さぶられて、意識せずに快感を貪ってしまっていた。

「あらあら、イキそうになるとこんなにも積極的なねえ、翠鈴ったら……ふふふ、処女のクセにお尻に指を咥え込んで、オチンポをしゃぶりながらイける変態なんて、貴女くらいのもではなくって……?」

「ふううんっ! いひゃっ、言わな……いで、くださっ……ひっぐううっ!」

口答えを遮るように陰核がきつく捻り上げられ、翠鈴は一際甲高く鳴き声を上げた。その被虐的な嬌声に興奮したのか、麗は口調を荒げ、淫らによがる女將軍を罵る。

「ほら、気持ちいいのでしょうっ、正直に言いなさいな! この売女!」

「んぐううっ、いやっ、いやです……気持ち、よくなんて……くひっ、ひうう……っ!」

苦悶の表情を浮かべ、必死になって抵抗の言葉を吐きだす。けれど膣道はピクピクと痙攣したように震え続け、菊壺は指を食い千切らんばかりに締めつけている。それは翠鈴の嘘を暴くなよりの証となり、麗はニヤリと口元を歪めて嗜虐的な笑みを浮かべた。

「嘘をついても無駄ですわ……さあ、処女より早く奪われたお尻の穴で、盛大に氣をやるのよ! ほら、イキますと言いなさい! お尻でイクって言うのよ!」

「そうじゃ、イッてしまえ! 儂の精を浴びながら、達するのじゃ、淫売が!」

于凱が強く腰を叩きつけ、翠鈴が表情を歪めると、その凶惡な肉棒が一気に引き抜かれた。背後からはキツキツだった菊壺へさらにもう一本の指が突き立てられ、思いきり腸壁が搔きだされてゆく。全身の毛穴が開ききるような快感の怒濤に、翠鈴は視界を眩い光に覆われ、意識がどこかへ飛翔するようにさえ感じた。それと同時に、美少女の目の前に突

きつけられていた肉凶器が、その先端を大きく膨らませる。

——ドブドビュルウッ！ ビュクビュクッ、ドプッ、ビクウッ！

「ひゃらっつ、ひやぐつ、ひい——っんっ！ イクッ、イクウウ——ッッ！」

ビクビクビクッと全身を痙攣させ、腰を高く突き上げた四つん這いという恥ずかしい体勢のまま、翠鈴は獣のような激しい叫び声を上げた。膣口からは迸るような淫粘液の水流が噴きだし、麗の指に激しく打ちつけている。それでも一向に絶頂の波は引かず、菊壺で蠢く指の動きに合わせて何度も身を打ち震わせ、悶え跳ねていた。頭の中では真っ白な閃光が広がり、なにも考えられない。翠鈴は場も状況も忘れてしまったかのように、他人から与えられた初めての快感に、身を委ねてしまっていた。

「ひっ、いひいんんっ！ ひあっ、あん……熱、い……ひやあ、臭いの……」

絶頂を迎えて敏感になった肢体に牡の体液をまともに浴びて、翠鈴はさらに悶える。その顔は固形物のように濃厚な于凱の精液で白化粧を施され、ほぼすべてが覆われてしまっていた。それを蔑むような笑みで見つめながら、麗が唇を寄せる。

「ほら、お射精だしくださった子種は、しっかり飲まなければなりませんわよ……れる、んちゅう、じゅぷっ……んれろおお……」

「ひあんっ、んっ……ちゅぷっ、んくっ、んんう……」

麗は翠鈴の白化粧を綺麗に舐め取り、それを唾液と絡ませてすべて翠鈴の口へと注ぎ込んでゆく。口内に広がる苦く生臭い味わい、そして絡みつく食感に背筋がゾワゾワと泡立

った。

(いやああ……不味いつ、臭いいつ！　こんなものを、飲ませるなどっ……うう……)

しかし、口移しで唇を塞がれた翠鈴が、その息苦しさから逃れるには混合汚液を飲み下すほかなかった。絶頂の余韻と酸欠に朦朧としながらも、それをコクコクと飲み下し――すべてを胃臓に流し込んだ翠鈴は、疲労のあまりか意識を失ってその場に倒れてしまった。

「さて……今日の宴はこれまでにございます……皆様、またの機会をお待ちください」

淫惨な狂宴に幕を引く麗の言葉が、どこまでも冷たくその場に響いた――。

（本当に人の心がそれほど単純だと思っているのでしょうか……そうであるならば、これほど施政者に向いていない者もないでしょうね……）

ため息を一つもらし、それに反論しようと口を開く——と、そこで。麗の言葉を聞いていた于凱が嬉しそうに手を叩き、下卑た笑いを混じらせた野太い声で答えた。

「ほっほう、さすがは麗じゃ……して、その餌とはなんのことか？」

「え……ば、馬鹿な！ このような戯言を聞き入れて、本当に上手くいくとでも——」

そこまで言いかけ、ようやくこれが茶番であることに気がつく。もとよりいかにして反乱の芽を潰すのか、その算段はついていたということだ。しかもそれは、翠鈴の予想に違わぬ淫猥で屈辱的なものにほかならないだろう。その想像が真実であることを示すようにいやらしい笑みを浮かべた麗は、チラリと翠鈴に視線を送り、そして答える。

「餌とは、先ほども申しましたが男どもの鬱憤の捌け口のことですわ……極上の美女に淫らな姿をさせておけばすぐにでも襲い、勝手に性欲として吐きだしてくれることでしょう……ふふ、しかもそれが天下に勇名鳴り響く軍師将軍となれば、なおのこと」

（ああ……やはり……）

頭の中にその冷たい声を響かせながら、翠鈴は先ほどの視線を思い返す。もう何度も言われてきたことだ、その瞳を見るだけで理解できてしまっていた。

『……もしも拒絶すれば、代わりに李姫様を供するというだけのことですわ』

聞いてもいない言葉が耳に反響し、屈辱に唇を噛み切らんばかりに歯を立てて、その怒

りをひたすらに押し殺す。睨みつけた視線の先には嘲るような笑みを浮かべた悪女の顔がある、けれど翠鈴はグッと拳を握り締め、うつむいたままそこに立ち尽くすことしかできなかった。



「あらあ、よくお似合いですわよ、將軍……どこから見ても、立派な牝犬ですもの」
「くっ、うう……だ、黙りなさい……うっ」

チャラ……と鎖の音が響き、続いて感じた首の圧迫感に言い返そうとした言葉がかき消される。翠鈴の首に嵌められた革の首輪、そこから伸びる鎖が麗に引かれたのだ。

「おうおう、よう吠える犬じゃ……言うことを聞かぬか！」

麗と並んでこちらを見下ろしている于凱はそう怒鳴りながら、いやらしい目つきで舐め回すような視線を送っていた。周囲を囲むようにしている数十人の護衛たちも同様の視線を向けており、翠鈴はそれを感じて、カッと恥辱の炎を肌で燃え上がらせる。

（はあ、んう……こ、このような格好……悪夢です、こんな……うう）

四つん這いで歩かされる翠鈴の胸衣は、胸元の布地をとてつもなく薄くされており、正面から見れば乳房の形、そして乳房の色までがはっきりと視認できる卑猥な状態にされていた。膝下まであった腰布衣は股よりもほんの少し上で切り取られており、普通にしているでも秘部が見え隠れする。その奥には股布さえ着けられておらず、元々薄かった恥毛は完全に剃り上げられてしまい、隠すもののない陰唇には一枚の術符が張られていた。そこに

は朱墨で『性奴』の二文字が綴られており、それが翠鈴のことを指していることを示すように、奥からは絶えず、チュクチュクと淫らな粘質音が響いている。

さらにもう一方の穴……不浄の穴でありながら快感を覚え込まされて、すでに膣道よりも敏感にされてしまっている菊壺からは、犬の尻尾を模した飾り毛が垂れ下がっていた。菊皺を丸く押し開いて挿入されている張り型、その端に、束ねた動物の毛がつけられているのだ。淫らな牝犬——その刻印を翠鈴に刻み込もうというかのような、世にも淫猥な衣装を着せられ、翠鈴は麗に鎖を引かれて歩かされていた。

「ほら、グズグズしていらっしゃらないで……早く来なさいな、翠鈴！」

「そ、そのような大声で……ひあつ、ああ……う、動かさないで、くだ……んうつ」

すでに宮殿の門からも足を踏みだしており、そこは陽光の注ぐ屋外だった。少し歩けばあらゆる店や民家の立ち並ぶ街道にあたり、声をだせばそれだけで人に届く可能性がある。民衆にこんな惨めな姿を見られたくないなどない、その思いが翠鈴に拒絶の声を上げさせるが、菊壺を犯す張り型の振動によって言葉は淫らな喘ぎへと塗り替えられた。

「あつ、ひいっ……っぐっ、うう、んうう……」

膝が砂利に擦れ、痛みが走る。けれどそんなものはすぐに気にならなくなるような快感が腸壁を突き抜け、子宮に響いてしまい、はしたなくも尻をくねらせてしまう。四つん這いでそのそれは、明らかに男を誘っていると思える淫らな動きだった。

「あらあら、いまからそのようなことでは……男たちの目に晒されれば、どうなっしま

うかわかりませんわね。……さ、そろそろ街中に出来ますわよ」

「う、嘘……本当に、ひあつ、うう……ひ、引つ張らないで、くださ……くうっ」

麗の言葉を裏づけるように、人々のざわめきが耳に届き始める。本当に、こんな姿の自分を民衆に見せつけるつもりなのだといまさらながらに実感が湧き、足が竦んでしまうのを感じた。けれどそんな翠鈴の躊躇もお構いなしに、手綱を引く麗はむしろ速めるように足を進め、すぐに立ち並ぶ家屋の陰までやってくる。

「ぐふふふ、もうすぐじゃのう……楽しみで股が濡れておるのではないか？」

「そ、そんなわけがありませんっ！ 戯言は、やめなさ……ひいんっ！」

于凱の足先が術符を押し込むように股間をつつき、痺れるような感覚が脳天へ突き抜けた。たまらず腰を跳ねさせる翠鈴を嘲笑い、麗の手が鎖を引つ張る。

「さあ……存分に晒しなさいな。みつともなくていやらしい貴女の姿を、荒れた民たちの目の前にねえ！」

「い、いやっ……ああああ——っつっ！」

足を踏ん張って抵抗するも、首を引かれる息苦しさに耐えかね、とうとう翠鈴は人々の喧騒の中へと引きずりだされてしまう。そこは街の広場——突然響いた絶叫に、仕事をしていた人々も何事かと視線を向け、そして元凶の存在に気づいて顔色が変わった。

「う、于凱だ……どうして……まさか、俺たちを殺そうってんじゃ……」

「へっ、構うもんか！ どうせいまの生活じゃ、死んでんのと変わりやしねえよ！」

ざわめきが大きくなり、それを聞きつけてあちこちから人が集まり、翠鈴たちを中心に人垣ができる。多くの民を失い活気が衰えつつあるとはいえ、それでもまだここには多くの人が暮らしていたということを、翠鈴は再認識させられる。

（あつ、ああ……いやあ、み、見られる……私のこのような、破廉恥な姿を……）

思わず地に伏せるような体勢を取ったことで、顔や剥きだしの乳房、そして股間を見られてはいない。けれどそんな格好で鎖をつけられ、四つん這いでいるところは衆目に晒されている、その事実には翠鈴は耳まで真っ赤に染まってしまう。

「お、おい……ありや女の子じゃねえのか！」

「——っっ!？」

不自然な態度が災いしたのか、民衆の一人が翠鈴の存在に気づいた。ビクリと身を竦めて縮こまる女將軍の背に周囲から何本もの視線が刺さり、言葉が投げかけられる。

「誰かの女房……って年じゃなさそうだな、なら娘かよ……惨いもんだ」

「うちの娘じゃねえが……くそっ、そのうちあんな目に遭わされちまうんじや……」

自分の身内を氣遣う言葉、そしてそれには翠鈴に対する同情までが込められていた。無関係の者でさえ思いやるその気持ちに、江の民の心の温かさを感じる。しかしそんな雰囲気をも吹き飛ばすような大声で、濁った声音が広場に響き渡った。

「ぐははははっ！ そんなに儂の犬が珍しいのか、困った奴らだわい！」

「い、犬だと……どこからどう見ても、人間だぞ……しかも、女の子じゃねえか……」

人に首輪と鎖をつけて引き回しながら、それを大だと豪語する于凱に対し、民衆が責めるような声を上げる。それでも于凱は氣にした様子もなく、隣で手綱を握っていた麗に同意を求めるように話しかける。

「麗よ……どうしてもこ奴らは、これを人間扱いしたいらしいぞ、しかしなあ……」

「いけませんわねえ、これほどはしたない牝犬ですのに……そうですわ、このコ自身に証明させてはいかがでございましょう……変態で淫乱な牝犬だということを」

——その言葉に、ゾクリと背筋に悪寒が走った。四つん這いで蹲ったままで、膝がガクガクと震えて止まらなくなる。それもそのはずだ、翠鈴はいま、宮殿を出る前に麗に吹き込まれた言葉を一言一句違わず、思いだしていた。

『よろしいですわね、將軍？　麗が証明なさいと申し上げましたら、こう言うのです……』

そして——とてつもない破廉恥な振舞いをしろ、と。

李姫を人質にしての逃げられぬ命令を、すでに翠鈴は下されてしまっていた。逆らえば間違いなく害は李姫に及ぶ……それは、先日の狂宴で思い知らされている。

（ですが……ほ、本当にあのようなこと——）

想像し、顔が真っ赤どころか恐怖の青に染められる。それはすでに人としての尊厳など失ってしまうような、最低の行為だからだ。

「お、お願いです……それだけは、どうか……っ」

たまたらず、通じるはずもない懇願をしてしまいそうになる翠鈴だが、すんでのところで

それを堪えた。こんな連中に頭を下げるなど、碎けそうな女將軍の心を支える矜持が許さなかつたこともあるが、それ以上に——李姫の悲しげな瞳が頭をよぎったからだ。

（そうです……私は、二度と……李姫様にあのような思いをさせません！）

軋んだ音が鳴るほどに奥歯を噛み締め、翠鈴は顔を上げた。その耳元に麗が小さく、そして冷たく響く声音でささやく。

「それでは、証明なさいな……牝犬將軍殿？」

「は……い……」

ピクンッと肩を震わせ、それでも気丈に振舞おうと毅然とした表情で、翠鈴は四つん這いのまま片脚を高く掲げてゆく。途端に周囲のざわめきが大きくなり、顔に熱がこもるのがわかつた。スウ……と肌を掠める空氣の冷たさに、自分がどれほど恥知らずな格好をし、なにをしようとしているのかを再認識させられる。

（うあ、あつああ……いや、いやいやあつ！ いやですつ……こんなつ……）

本能的に脚を閉じそうになるが——そのとき、真正面から驚愕に引きつった声が響いた。

「うおつ！ お、おい……こりやつ……姜將軍じゃねえのかっ!？」

「……………っつ！」

声にならない悲鳴が、翠鈴の喉から飛び出す。以前、同盟を結ぶ折に趙攸とともに江を訪れていたこともあるのだ、気づかれなはずもなかつた。

（あ……あああ、だめ……気づかない、で……見ないで、お願いです……）

拒絶も否定も、なにかを言うことさえ許されず、翠鈴はただ頭を振りながら脚を掲げてゆく。すでに腰の位置よりも高く脚が掲げられているせいで、身体を開いた方向からは翠鈴の姿が余すところなく見えてしまっていた。

「そ、そんな……嘘でしょう！ あの智勇兼備で、仁義に厚い將軍が、どうして……」

胸衣を透けて見える真っ白な柔双丘、術符一枚で覆われた淫水音の響く股間、そしてその符に書かれた性奴の赤文字までがすべて見られている——それを思った瞬間、燃え上がるような羞恥心とともに、膣道の奥深くがキュンッと激しい疼きを發した。

（んあつ、ああ……ど、どうして、このように……くうつ、ううん……）

腹の奥底から湧き立つ、はつきりとした快感の波を否定することができない。そのまま脚は止まらずに高く掲げられ、羞恥の色で赤く染まった頬、潤んだ瞳を見せながら、翠鈴は己の恥部をすべて曝けだしてしまう。

（ふあつ、んっ、は……恥ずかしいっ、のに……こんなっ……）

周囲の民たちの視線を胸に、そして術符越しの陰唇に感じて恥辱に震えた。けれど膣道がざわざわと蠢動し、淫蜜が溢れてくるのが自分でもわかってしまう。

「まあ……どうやらこの牝犬、催してしまつたみたいですわね。まったく、大勢の人間に見られているというのに、奔放なことですわ……」

「も……催すって、じよ、冗談だろ……將軍が、そんな……」

同情、興奮、そして微かな軽蔑……すべての入り混じった視線が四方八方から突き刺さ

り、翠鈴は真つ赤な顔をうつむかせて黙り込む。その態度に、民衆も麗の言葉の真実を悟ったのだろう、今度はあまりにも不躰な視線を、遠慮もなく股間に向けてきた。

「く……くそお、あの將軍が……なんだって、こんな……」

まるで我がごとのように自分を思いやり、悔しがる民を前に心が痛くなる。彼らの期待を裏切るような姿を披露することが、どうしようもなく耐え難く、その場から逃げだしてしまいたい気持ちに駆られる。だが――。

「あくつ、うつ……うつ……」

チャラリと鎖の音が鳴り、麗の手によつて首輪が思いきり引かれた。動きも言葉も止めてしまった自分に、続きを催促しているのだ。逃げられぬことを悟り、翠鈴は瞳を悔しさの涙に潤ませながら、ブルブルと震えた唇を開いてゆく。

「わ、私……へ、変態牝犬の、姜翠鈴……は……このような往来で、オ……オシッ、コ……をしたく、なつてしまいました……失礼かと思いますが、皆様の、前で……さ、させていただきますう……んっ、ひいん……」

菊壺に突き刺さつた張り型が低く唸り、翠鈴は小さく腰をくねらせた。快感に喘ぐ艶顔をそのままに、翠鈴は掲げた脚と同じ側の手を股間に伸ばし、術符の端をそつとつまむ。

（んはっ、あつ……ふう、はああ……んう、これを、剥がせば……も、もう……抑えが）

外出前に水分を取らされ限界を迎えていた膀胱は、この術符で堰き止められているようなものだった。触れただけで剥がれそうな気配を感じたのか、尿口は震えだし、高く掲げ

た足先までが痺れたように痙攣する。

すでに民衆たちは目が離せなかった。息をするのも忘れたように目の前に広がる淫靡な光景に見入り、時折、ゴクリと生唾を飲む音だけが聞こえる。

——ペリ……ペリ、ペリリ……ジククツ、チュクウ……。

剥がれる術符に引かれて媚粘膜が擦れあい、卑猥な水音を奏でる。札がめくられるにつれて、濃桃色に濡れ光る淫肉が、空気に撫でられてピクピクと震えながら現れた。湯気が立つほどに火照った陰唇は、淫水で糸を引きながら、その口を卑猥に開閉させている。小水がもれるよりも早く、膣口に溜まっていた淫液がドロリと流れて地面に滴り落ちた。封を解かれたことで、こもっていた牝臭が溢れだし、翠鈴の周囲に立ち込めてゆく。

「ふあつ、あんつ……んっ、はあつ！ で、出る……う、出ますっ、ああつ！」

己の放つ牝の淫気にあてられたように、悩ましく眉をひそめながら、翠鈴の口から限界を告げる言葉が飛び出す。熱を絡ませた吐息を吐きこぼし、白い指先がつまんだ術符を完全に陰唇から引き剥がした——その瞬間。

——チヨロツ……チヨロロロロ、シャアア……ツツ！

堰を切った水流は勢いよく尿口から噴きだし、薄黄色の放物線を描いて地面に湯気の立ち上る水たまりを広げてゆく。進りが尿道を駆け抜ける解放感にうっとりとうと瞳を細め、翠鈴はその快感をこらえることができなかった。

（ふあつ、い、いやああ……み、見られて、る……のにいっ！ いひいっ、ひんっ、き…



…気持ちいい……オシッコ、気持ちいいっ！ どうして……)

我慢に我慢を重ねた生理欲求の解放は、抗いがたい麻薬のような魅力を秘めていた。大勢の民に……それも男に見られているのも気にならないほどに心を蕩かされ、翠鈴は括約筋に力を込めて、ジャッ、ジャッと小刻みな水流で地面を穿ちながら、腰をくねらせて身悶える。こうしなければ李姫の身が……などという危惧は、すでに頭にはなかった。

「うあ……マ、マジで小便してる……あの、姜將軍が……」

「し、しかも……なんてエロい顔してやがんだ、信じられねえ……ごくつ」

男たちのささやきが耳に届き、はしたない姿を自覚させられて頬が赤く染まってゆく。

(う、うう……み、見ないでっ、こんなの……見ないでください……お願いですっ！)

羞恥に染めた顔を背けながらも、様々な快感が混じりあつて翠鈴の背がブルッと小さく震える。それでも小水の入りは止められず、鼻の奥にツンと突き抜ける臭いを漂わせた卑猥な染みは、瞬く間に誰の目にも見えるほど大きくなっていた。やがて放尿が終わるも、まるで絶頂後の痙攣のような身震いが二度三度と続けられ、周囲の官能的な空気を一段と色濃くしてしまう。

「はあっ、あ……はあ、んう……」

排泄を終えたばかりの尿口からは滴がポタポタとこぼれ、いまだ開かれたままの翠鈴の股下に、点々と黒い染みを増やす。しかしそれを上回る量の淫液が滝のように膣口から垂れ流され、染みを塗り潰すように地面に糸を引いた。いつまでも痴態を晒し続け、口の利

けない翠鈴に代わり、麗がクスクスと笑いをもらしながら口を開く。

「まあ、粗相をただけでは飽き足らず、こんなところで盛ってしまうだなんて……本当仕様のない牝犬ですこと。……ほら、なにをしたいのか、自分の口で言いなさいな」

（はあっ、くうう……悔しいっ、こんなことを、言われるなど……っ）

屈辱に唇を噛み締め、それでも守るべき人のために激昂しそうな心を懸命に抑える。せめて心だけは屈さない、その思いは抗う気持ちを奮い立たせ、屈辱的な言葉を吐き捨てるように、小さくささやこうとする。――だが。

「み、皆様あ……お見苦しいところを、お見せしました……っ、私は、お……男日照りが続いているため、このような変態的行為をしてしまう恥知らずな牝犬です……もしも哀れとお思いになられるなら、この牝犬の……姜、翠鈴のお……へ、変態マ○コを、犯して……交尾して、くださ……い……うくっ」

どういうわけか、快感に火照る身体は自分の言葉に煽られるように疼きを増し、次第に声が震えてしまっていた。なんとか言い終え、指示されていたように指で陰唇を割り開き、卑猥に濡れ光る桃色の膣粘膜を衆目に晒すと、それだけで背筋がゾクゾクと震え、膣肉がざわつくのが感じられた。命を絶つことよりも辛い、身を焦がすような羞恥に頭がクラクラする、それなのに全身は火がついたようにカァッと熱くなつてゆく。菊壺で張り型が振動するのに合わせ、膣口からは白濁した牝蜜が弾けてビュッと噴きだし、その感覚に瞳が淫らな輝きを放つ。見せつけている乳房の先端では、薄桜色の可愛い乳首が、男の指

をいまかいまかと待ち望むように硬く尖り勃ち、ヒクヒクと震えていた。

「お、おい……將軍、あんなになつて……」

「ああ……けど、なあ……」

傍目にも明らかなほどに発情してしまっている翠鈴、けれど男たちは啞然とした表情や悩んだ素振りを見せるばかりで、けつして動こうとはしない。そうして、なおもひそひそとささやきあうのを耳にした麗が、口元を歪めて問いかける。

「あら、どうしたのかしら？ 目の前にこれほどの美女がいるというのに、犯すこともできない腑抜けばかりなのかしら、この国は……ふふ」

——途端に、カチンときたのか男たちは息を荒げ、心外だとばかりに叫び返す。

「馬鹿言つてんじゃねえ！ 義に厚い將軍のことだ、おめえらが誰ぞ、人質にでもしてんだろ！ じゃなきゃ、こんな格好を望んでなさるはずがねえ！」

「そうなんでしょう？ なんとか言つてください、將軍！」

まるで翠鈴の存在こそ、江がこの隷属から逃れるための希望であるかのように思っているのか、口々に温かい言葉がかけられる。たとえなんらかの意図があるにせよ、自分のこんな姿を見てなおそう言ってくれる心遣いに、ジンと胸が熱くなる。けれど——。

（ああ……皆さん、そんなにも私のことを信じて……ですが……すみません、私は——）

——その言葉に応えることはできない。いや、それどころかもっと淫猥で、惨めな姿を晒さなければならなくなるのだ。

「ぐふふふ、なんとも困った奴じゃな、どれ……」

その態度に于凱はニヤニヤと下卑た笑みを浮かべ、李姫の膣口から突きだした張り型の端を指で掴んだ。きつく食い締める括約筋を無理やり割り開くように、太い張り型がゆつくりと引きだされてゆく。

「ふあ、ふくつ、んぐうう……んあつ、ふやああ……」

半透明の淫液を纏わりつかせ、テラテラと濡れ光る張り型の半分ほどが陰唇を割り開いてその姿を見せる。張り型の亀頭部分に膣道を抉られ、快感に蕩けた声を溢れさせつつも、李姫は抵抗する様子も見せない。やがて――。

――ヌルウウ、ブチュツ、グチュウウ……ヌロオッ……。

「あううつつ！ んふつ、ふうう……ひあつ、ああ……抜け、てますう……」

先ほどまで咥え込んでいた于凱の肉棒と、ほぼ同じくらいの太さと長さを持つ張り型が粘膜を掻きだしながら引き抜かれ、地面に落とされた。亀頭部分が膣口に擦れた刺激に悶えながら報告する李姫の股下では、湯気を立たせている張り型がまだ麗の道術によってうねうねと蠢いている。張り型を失った膣口は、早く次の硬い牡槍を欲しいと言っているように、媚粘膜をざわつかせてパクパクと妖しげに開閉していた。

「ぶははははっ、みっともない姿を晒しおって。よからう、挿れてやるぞ……奴らに聞こえるように言ってやれ、お前はもはや、儂の所有物になったのじゃとなあ」

ピタリと亀頭が陰唇に押しつけられ、その熱を感じた粘膜はうねり、絡みついてゆく。

小さく背中を跳ねさせ、李姫は涙をこぼしながらその命令に忠実に応える。

「あ、ああ……ありがとうございますうっ！ み、皆、見ててええっ！ わ、わたくしい、于凱様にこれから犯していただくのお……わたくしは、于凱様の所有する、専属の精液便所だからあ……いつでも、どこでも、こうして犯していただくのおっっ！」

そう言い終えるとはほぼ同時、于凱が腰を進め、剛直が粘膜をこじ開けながら埋まってゆく。押し開かれる膣壁は粘膜同士の擦れるくぐもった音を奏で、辺りに響き渡らせた。

——ズプウウウツツ！ ニュリユウ、チュゲツ、ジユプウウ……。

「あひいいいんっつ！ ひああっ、あんっ、んああっつ！ オ、チンポ、は、はひつてえ……ひふんっ、膣内あ……グリグリッて、削られてるう……」

肉棒の虜となった人妻娼婦は淫らに叫びながら、淫液溢れる膣道に牡槍を捻じ込まれ、身体を抱え上げられた。着物を纏わりつかせただけの裸体を城壁に向け、民たちに痴態を晒しながら犯されるその姿を自覚し、李姫は羞恥に身悶える。それでも、待ち望んでいた硬く熱い塊をもうけっして離すまいと括約筋に力を込めると、トロトロに溶けほぐれた媚粘膜に肉の感触が押しつけられ、自然と背中が跳ねる。膝下に手を入れられ、衆目に晒す秘部では肉の擦れる粘質音が響き、子宮の奥までがキュンと疼きを放っていた。

「ぐははははっ、たまらんのう！ 夫の目の前で犯す妻のマ○コというものは、いつ味わっても具合がよいわ！ ほれ、もっとしつかり腰を使え、チンポを抜くんじゃ！」

調子の乗った笑い声を上げる于凱に腰を突き上げられ、李姫の興奮は被虐の官能とともに

にますます高ぶってゆく。

「んふっ、ふうっつ、ひぐううっつ！ ふやつ、あはああ……き、気持ちいい……」

赤子の拳ほどもあるうかという亀頭が子宮口を挟り、膣道を拡張するように肉壁をこそぎながら抽送される。痺れるような快感に呂律を狂わせながら、李姫は媚粘膜を震えさせて肉棒に絡みつかせ、口でそうしたように淫口でも丁寧で愛情深い奉仕を施してゆく。

「んむっ、おおっ！ むふふふ……これほど強く締めては膣内にだしてしまうぞ、よいのか？ 夫の前でほかの男に孕まされることになるのじゃぞ？」

「はひいつ、いつ、いいですううっつ！ くださいっ、たくさあんっ！ んはっ、あはあ
ああ……こ、子種くださあい……于凱様の濃ゆいの、精液い……ドプドプッてえ、李姫の
オマ○コにつ……子宮の奥までっ、射精してくださいませえっつ！」

腰を下に突きだして于凱に押しつけながら、李姫は本心からそう思っているように子宮口を亀頭に擦りつけて快楽を貪っている。顔を火照らせて行為に没頭する二人に反し、城壁の上で趙攸は顔を青ざめさせ、それを呆然とした眼差しで見つめていた。

「李姫……おおっ、李姫よ……っつ！ うくっ、ううう……っつ！」

手の平から血が滲み、城壁の石畳に赤い滴を落としてゆく。もはやこれ以上は見てなどいられない——妻があのような変わり果てた姿になってしまふまで、どうすることもできなかった己の不甲斐なさに歯噛みし、苦悩しながら趙攸は顔を背け、覺束ない足取りでその場を離れる。しかしその耳にはしつこいほどに甘ったるく、媚を売するような娼婦のごと

き嬌声がいつまでも響いており、こびりついていた。

「んはああんっつ！ いいですつ、オマ○コオッ！ し、子宮まで、届いてえ……ひいんっ、ひあつ、あつ……ひぐううつ、んんうつ、くるつ！ イグッ……ひううんっつ！」

感極まったように高い嬌声が迸り、仰け反った背がビクビクッと跳ねる。顔中をドロドロに染めた大量の唾液は上向いた喉を伝い、キラキラと飛沫を撒き散らす。

「ぶははははっ！ もうイキおったか、この淫乱めが！ お前を信頼する民や夫に見られながら犯されるのがそんなによいのかっ？ ほれっ、ほれほれほれいっ！」

趙攸が城壁からいなくなつたことさえも気づかず、于凱は嬉しそうな口調で李姫を辱めながら腰を上下に振るい立てる。そんな言葉責めにさえ興奮させられるのだろう、李姫は狂つたように髪を振り乱し、頭を踊らせながら叫びを放つ。

「はひっ、あはああつっ！ オマ○コオ……あふうんっ！ 牝犬マ○コ、犯されてへええっつ！ ひあつ、あつ……み、見られるのおつ！ しゅごくっ、いひのおおつ！」

——グジュッ、ニュプッ、ジュールヌプウウッ！ グチュッ、ジュパンッ、ズチュウッ！ 水気をたっぷりと孕んだ粘膜同士が擦れ、腰と尻の肉がぶつかりあう——あまりに卑猥な性交の音は城壁の民たちにはつきりと届き、もはや誰もが目を離せずにいる。

「ぐふふっ、いいじゃろう。ほれっ、くれてやるわ！ 儂の子を孕め、淫売めが！」

——ビクビクビクッ！ ビュルッ、ドクッドプウッ！

子宮口にピタリと押しつけられた亀頭が膨らみ、膣の最奥で熱い粘液の塊が弾け飛んだ。

蕩けた肉に絡みつくその感触にゾクゾクと震え、李姫は大口を開けて嬌声を叫ぶ。

「あひつ、ひぐうんつつ！ はふううつ、イ、イグウウツツ！ ううんつ、おほおお……オマ○コ、はりやんでえ……イグのおおつつ！ んおつ、あひいいんつつ！」

抱え込まれた全身を壊れたカラクリのように痙攣させ、脱力した尿口から小水をもらし、結合部から愛液を撒き散らしながらはしたなく艶美な絶頂を晒す。観客の目を楽しませるように、反り返った身体の上で乳房がタプタプと波打つように揺れ躍る。その感覚さえもさらなる快感を送り込むのか、李姫は絶頂から降りられなくなつたように四肢を痺れさせ、熱い吐息をもらし続ける。かつての民たちの蔑みと憐憫、そして劣情を孕んだ視線を浴びながら李姫は満足しきつた牝の表情を浮かべ、于凱の腕の中にその身を委ねて脱力させた。



「これ以上の籠城はもはや無意味……いさぎよく、開城するべきではないのか……」

「馬鹿な！ あれほどの国辱を受け、そのような真似が許されるものか！」

城内の軍議の間にて——趙攸とその将や参謀たちは、延々と議論を重ねていた。けれど憔悴した顔の趙攸は一度も発言せず、文官たちは民のためを思えば降伏すべきと主張し、武官たちは国の威信を懸けて戦うべきだと主張し、話は平行線を辿るばかりである。

——そのとき、軍議の間の扉が開かれ、その軋む音が広間に響いた。

「誰だ、いまは軍議の最中だ……ぞ……ぞ……っ!」

やや興奮気味に声を荒げていた一人の将が扉のほうを睨み、言葉を詰まらせる。その様



子に広間の全員がそちらに視線を向け——立っていた人物を目にし、顔に喜色を浮かべる。
「きよ……姜將軍っつ！ お戻りになられたのですかっつ！」

その言葉に、紫の胴衣を着た美少女——翠鈴は口元に笑みを浮かべて答える。

「……ええ、いしましたが。城外へ通ずる抜け道……あれを利用させていただきました……」
将たちはにわかに色めき立ち、特に趙攸は驚きの表情で立ち上がると翠鈴のもとへ歩み寄り、その手を握って自らの額に押し当て、咽び泣いた。

「よくぞ……よくぞ戻った、翠っつ！ お前が捕らえられたとの報を受けてから今日まで、身を案じぬ日などなかったのだ……っ」

そうして、趙攸はガバッと顔を上げると、そこにいた将たちに向けて檄を飛ばす。

「これで、奴らを追い返す算段もつこうというものだっ！ 皆の者、打って出るぞ！ 早速で悪いのだが、翠よ、お前には全軍の指揮を……翠？ どうした、す——っつ!？」

趙攸への反応がない翠鈴の様子が引っかかったのか、趙攸は心配げな顔で翠鈴のほうを振り返り——その瞬間、気がつくとも床の上に組み伏せられていた。

「なっ、なにをする、翠……っ、まさか……お前までが……くっ、うぬうっ！」

振り払おうともがくも、仰向けのままでは腰の上に跨る相手にさしたる抵抗もできず、逆に関節を極められて抵抗の手を止められてしまう。

「打って出られるというのでしたら、これほどの僥倖はありません……麗様には、趙攸様たちを城からださせると命じられておりましたから……ですが……」

低くささやいた翠鈴は、唇を舌先でペロリと舐め上げ、腰布衣をめくり上げる。そこはすでに粗相したかのように濡れそぼっており、股布さえも着けてはいなかった。

「その前に、少しでも楽しんでいただきます……李姫様があれほど乱れているのを見せつけられて……私も、我慢の限界ですの……」

その顔を見て、趙攸は背筋をゾクリと震えさせた。凛々しくも愛らしかったあの翠鈴が、見たこともないような淫蕩な、発情した牝そのものという表情で見下ろしているのだ。

「お前たちっ、なにをしている！ 翠を取り押さえよっ……うっ!!」

趙攸が思いだしたように周囲へ怒鳴ると、あまりのことに呆然としていた将たちはようやく正気を取り戻し、二人を引き離そうと慌てて駆け寄る。けれど時すでに遅く——趙攸の首には、翠鈴の手にする短刀の刃が押し当てられていた。

「趙攸様のお命が惜しければ、動かぬようお願いいたします……」

冷たく微笑むと、翠鈴は片手で器用に趙攸の胴衣をはだけてゆく。剥きだしになった趙攸の鍛えられた胸板に手の平を這わせ、翠鈴はホォ……と熱っぽくため息をもらした。

「はぁぁ……遅いですが、趙攸様……さて、こちらのほうはいかがでしょうか……」

スルスルと肌の上を滑る手の平は脇腹を撫で、下腹部よりさらに下へと伸びてゆく。胴衣の下に隠れ見えない股間を撫で回しながら、翠鈴はうっとり瞳を細め、趙攸を見下ろして呟いた。

「あっ、はぁぁ……趙攸様、期待していらっしやるのですね、このように大きくさせて……」

…んっ、ふうう……それでは、早速……鎮めて差し上げます……」

「よせっ、よさぬか翠——くっ、ううつっ！」

それは李姫の痴態を見ていた時からこうだったのか、胴衣に包まれた下半身では、牡膣がすでに爆発しそうなほどに硬く屹立していた。瞳を輝かせ、翠鈴はスルリと胴衣を引き下ろし、待ち焦がれていた肉棒を空気に晒す。

「はあ……あん、これが、趙攸様の……オ、オチンポオ……李姫様がおっしゃっておられたほど、小さくも短くもなく……とても立派で……んうつ、んふう……」

于凱のモノに比べれば小さいとはいえ、成人の男としては十分すぎるほどの大きさであるその肉塊を丁寧な撫で回し、握りながらそんなことを呟く。その熱と感触に身を震わせ、翠鈴の膣口はまた新たな牝液を垂れこぼし、趙攸の腰の上にトロリと伝い落とした。たちまち立ち上る牝の香りに趙攸はさらなる興奮を促され、翠鈴の手の中で肉棒をビクンビクンと跳ね上げさせてしまう。

「あはあ……こんなに勢いよく勃起させて、とても美味しそう……んふふ、たつぷりと味わわせていただきます、んあっ……はああんっ、んうつ……！」

身体をずらし、肉棒に膣口をピッタリとあてがうと、そのまま亀頭だけを呑み込んで肉壁でキュッと締めつける。于凱と李姫の性交で完全に発情してしまっていたのだろう、肉棒の味は熟れた膣肉をどこまでも刺激し、官能に心を酔いしれさせた。

「よおく、ご覧になってくださいませ……翠鈴の淫乱マ○コがあ、趙攸様のチンポ♥ズ

ブズブウッて食べさせていただきますからあ……んはあ、はあつ、んふううつつ！」

膣奥から流れた淫液が、肉棒の亀頭から根元までを卑猥に濡れ光らせる。そのまま前後に揺すられる腰の動きに、目の眩むほどの快感を得て腰を大きく跳ね上げた趙攸は、呻きながらもその動きを制止するよう、懸命に声をかける。

「ふくううつつ!! す、翠よ……よさぬかつ、私には李姫がいるのだ……そのようなことは、やめよ! うくつ、うううつ！」

だがそんな制止も翠鈴の心には届かず、瞳を淫らにトロロンと曇らせたまま、裏筋を膣圧で刺激しつつ、熱っぽい声でささやくように告げる。

「んあ、はあ……そのようなことをおっしゃって、もうイッてしまいそう……というだけなのでしょう? これほど立派なモノをお持ちだというのに早漏では……ふふ、李姫様にご満足なさらなかったのも、もつともですわね……んふつ、ふくうう……」

「うぐつ、ううう……よせ、よさぬかつ……うくうつ！」

生温かい媚粘膜に包まれ、趙攸は腰から下が蕩かされるような快感に取り込まれる。その反応をチラリと確認し、翠鈴は淫靡に唇を歪めた。

「ふふ……李姫様のおっしゃられたとおり、本当に早漏だったのですわ、趙攸様? 于凱様とは大違いです……あの太く逞しい肉棒に、私も李姫様も何度も貫かれ……射精されるまでに幾度達してしまったか、数えきれませんでしたからあ……んはっ、ああん……」

犯された快感を反芻し、肉棒を咥え込んだまま翠鈴は腰を震わせ、小刻みに跳ねさせる。

グシヨグシヨに濡れた腰布衣は完全に尻房に張りついて、形がくつきりと浮かんでいた。そこに周囲からの視線を感じ、翠鈴は羞恥の快感に腰をくねらせる。

「んっ……さっきのを、ご覧になられていたでしょう？ 李姫様がヒィヒィと喘いでいらつしやった、あの牝犬のような姿を……くふっ、ふぁ……あ、あれだけ、気持ちよかったですよ……あはっ、またビクンッて跳ねて……李姫様の犯されるお姿を思いだされて、興奮なさったのですか？ いやらしいお方……ひうつ、んはあっ……」

屈辱的な言葉責めを受けつつ、趙攸は下半身から込み上げる快感をこらえきれずに脚をブルブルと震わせた。すでに閨節を極められているわけではないというのに、趙攸は翠鈴の放つ雰囲気呑まれ、その淫行から逃れられないでいる。

「よすのだ、翠よ……うくっ……お前らしくもない……ふううつ!!」

その言葉が気に食わず、翠鈴は腰を沈め、肉棒の半ばまでを膣道に埋め込んでしまう。

「はあっ、んふう……もうよいではありませんか、李姫様はあのように于凱様に抱かれて悦ぶ、淫売なのですから……んあっ、あぐう……んふふっ、それに、趙攸様も悦んでおられるではないですかぁ……妻がいるからなんだとおっしゃるのです……?」

「な、なにを言うのだ、翠——くうつ!」

主である趙攸には刃を向け、妻を貶めるような発言をし、臣としての信義に反するような行為を繰り返す翠鈴。窘めようとする趙攸の胸板に爪を立て、カリッと引っ掻いてその口を黙らせると、いよいよだというように瞳を淫らに染め、細めた。

「んっふうう……趙攸様、気持ちよさそうに悶えて……全部挿れてしまえば、それだけで達してしまいそう……んあっ！ んくっ、ふああ……あっ、も、もう……ううんっ！」

苦悶と快楽に歪んだ趙攸の表情を見下ろし、翠鈴は嗜虐の悦びに打ち震えつつ、そんな姿をかつての仲間たちに見られているという被虐的な羞恥に身悶える。

「あはあんっ、もう……が、我慢できません……奥まで、挿れさせていただきますね、趙攸様あ……んんっ、くふっ……ふやあああっっ！」

——ズチュウウッ！ ニチュ、ジユブウウ……ズップウウッ！

淫蜜の溢れる膣道を肉塊に掻き分けさせ、翠鈴の腰が自重に任せて沈み、根元までギツチリと啜え込んだ。媚肉を圧迫する燃鉄のごとき熱さ、それらは雷のような衝撃となつて子宮を突き抜け、脳天までを痺れさせる。蕩けた膣内を貫かれるその衝撃に喘ぎをもらし、たちまち背中が仰け反つてゆく。爪先までがジンと熱い疼きに呑み込まれ、身動きもできずに跨ったまま、微かな痙攣を繰り返す翠鈴——その股下で、趙攸が低く呻いた。

「んくおおっっ！ うあっ、す、翠——うううっ！」

——ドクドクドクッ！ ビュルッ、ビュクッ！

絶頂寸前まで昂ぶらされていた牡槍は、絡みつく熱い感触にたまらず限界を迎えた。尿道の半ばまで込み上げていた白い迸りが一気に解放され、とてつもない勢いで発射される。「ひっぐううっっ!? んあっ、っはああ……で、出てるう……イッたあ、ば……ばっかり、のお……オマ○コオ、にい……キュッて下がった、子宮、にい……ふひいん……んあっ！」

挿入の圧迫だけで絶頂を迎えていた翠鈴に、さらなる快感の追い打ちがかかる。牝の性を剥きだしにさせるような牝のマーキングを身体を中心に刻み込まれ、ガクガクと大きく身を痙攣させ、上気し蕩けた表情を晒す。

「んふっ、ふああ……や、やっぱり、早漏チンポ……だけど、このままあ、続けます、ねえ……くっ、ふううんっ！ んひっ、ひやあっ、あんっ、んひいっっ！」

「うぐああっ、翠……よせっ、くうっ！」

そんな趙攸の苦悶の声も意に介さず、翠鈴は貪るように腰を揺すり、萎えた肉棒で淫蜜を掻きだすように上下に扱き立てる。その間も一切力を抜かず、熱く蕩けた媚肉に擦り上げられた肉棒は、趙攸の意思とは関係なく激しく勃起してゆく。

「あはああっ、また硬くなつてますよお……んうっ、んふうう……はあっ、ほらあ……そこで見てる皆さんもお……オチンポだしてえ……おしやぶりたいんですからあ……」

見ていた者たちの股間も、すでに胴衣を押し上げているのが明らかにわかるほど屹立していた。けれどあまりに非現実的な状況を前に、ただただ呆然とし、動けないでいる。なによりいま城は囲まれ、このようなことをしている場合ではないはずなのだ。

なんとか翠鈴を取り押さえなければと将兵、参謀が考えを巡らしていると、それさえも許すつもりはないのか、翠鈴は冷たく唇を歪め、短刀を趙攸の胸に突きつける。

「ほら、はやくう……皆さんに、選択の余地はありませんので……んうっ、あはあっ！」
ツンと尖り立った乳首を胴衣に浮かせ、翠鈴が腰を振るうとタプタプと乳房が跳ね踊っ

た。結合部からは蜜液と混じりあつた白濁が噴きだし、飛沫となつて二人の腰をドロドロに染めてゆく。そして言葉どおり肉棒を咥え込みたくて仕方ないというように開かれた唇からは、艶かしく動く舌先が宙を舐め、男たちの劣情を煽り立てる。

「くっ……や、やむを得ん……殿の命と引き換えならば……」

趙攸のことを氣遣いながらも、己の肉欲に屈した男が一人、また一人と翠鈴に歩み寄り、胴衣の下から剛直を取りだして突きつけてゆく。黒々とした使い込まれた牡槍、包皮からほんの僅かだけ龟头を露出させた肉棒、血管の筋を色濃く浮き立たせた太く短い肉塊など……そのどれもが牡臭を漂わせて翠鈴の鼻腔をくすぐり、その臭いに脳は桃色の霧に覆われ、瞳が蕩けさせられた。

「んはっ、いっばあい……オチンポッ、こんなにたくさんっ！ はあむっ、んぐっ、んじゅるるっ、んふっ、んうううっ！ んひっ、はあんっ、んちゅっ、じゅぶう……」

瞳を淫らに輝かせ、口で二本の肉棒に奉仕しながら、両手にも別のモノを握って激しく扱き上げる。その指先は龟头を捏ね回し、裏筋をくすぐり、尿口に突き立てられて男の絶頂を誘ってゆく。そうしながらも趙攸の肉棒をきつく締めつけ、またすぐにでも弾けそうなほどにビクビクと躍動する肉の感触に、膣液は際限なく愛液を噴きださせていた。

「あひっ、ひゃぐっううっ！ んむっ、んむうゝ、んじゅっ、じゅばっ、じゅるじゅぶっ！」

頬が落ちそうな美味を感じながら、翠鈴は何本もの肉棒を代わる代わる口に含み、口内

粘膜をすばめて舌を絡ませ、唾液で洗い流すようにしゃぶり、吸い立てる。口にしていな
い肉棒は手で扱き、肌を押しつけて奉仕を施してゆく。荒々しい手が髪を掴んで肉棒に巻
きつけて扱こうとも、乳房を突き刺して捏ね回そうと、それを不快に思うどころか身が蕩
けるほどの快感を覚えつつ、くぐもった嬌声をもらして身をくねらせる。

「んぶあつ……はあつ、こつち、こつちのチンポッ、ビクビクッてしてるうつ！ での
つ、んはあつ、んむつ、れろお……ちゅばあ、だひてえ……身体にかけてつ、口にも、顔
にもおおつ！ あひつ、ひあああつ！」

舌先と指が鈴口に突き立てられ、手の平と口内で白濁汚塊が弾けた。刹那、苦味の濃い
青臭い味と香りが全身を包み込み、翠鈴はうつとりと瞳を細めて微笑む。黒髪にドロドロ
の汚液をかぶりながら、汚される快楽に表情を蕩けさせ、指で拭った精液塊をグチュグチ
ユと揉み潰し、ゆつくりと口に運んで舌で舐め取ってゆく。

「えおおお……んむつ、ちゆるつ……ふあ、おいひい……んうつ！ んはあつ、オ、オ
マ○コの、奥うつつ！ あはつ、ふ、震えてええつつ！ でのつ、でののおつ？」

「くつ、ふううつ……翠、よつ……くあああつ！」

精液まみれで微笑む淫靡な姿に昂ぶった趙攸は、またも膣奥に盛大な射精を浴びせてし
まう。締めつける膣壁に尿道の奥からすべての精を搾りだされるような感覚、自分よりも
遥かに年下の女にいいように射精させられる屈辱に、趙攸は顔を真っ赤にしながらも、そ
の快楽に抗うことができなかった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>